
助っ人

Type510

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

助っ人

【Nコード】

N2327Y

【作者名】

Type510

【あらすじ】

碓シンジが、サイドインパクト後から時間を逆行し、狩威シンゴという別の人物として、“助っ人”という立場で未来を変えていく。

第一の布石

「碇ユイさんに会いたくはありませんか？」

碇ゲンドウは驚愕した。突然目の前に“出現”した男に。そして、その男の口から放たれた一言に。

助っ人 第1話 第1の布石

ここは特務機関NERV 総司令執務室。誰にも気付かれずに潜入することは不可能に近い。それに、男が言った言葉は、彼は自分たちの計画を知っている可能性が高いことを示していた。男の身長は180センチ前後、声や体格から、若者であることはわかった。ジーンズに黒いパーカーを着ているが、フードを被ってやや下を向いているため、顔ははっきりとはわからない。しかし、ただものではない。そう思いゲンドウは焦ったが、数秒で冷静さを取り戻し男に訊ねた。

「誰だ、貴様は」

「僕の問いに答えて下さい。碇ユイさんに会いたくはありませんか？」

「ああ。だが、今はまだ不可能。いえ、僕なら会わせてあげる事ができますよ。正確には“初号機の中からユイさんをサルベージすることができる”です。まあ、僕が出すいくつかの要求を呑んでいただければ、ですがね」

ゲンドウの言葉を遮るように、男はフードを取りながら言った。

「！！！」

やはり、ただものではなかった。彼の瞳と髪は、銀色に輝いていた。彼は何らかの“力”を使ってこの部屋に侵入し、その“力”でもってユイをサルベージすることができるのではないか、ゲンドウは直感的にそう思った。彼に絆を求める蒼い髪の少女の存在がそう思わ

せたのだろつ。

「…要求は何だ？」

「僕を信用して下さるんですね？要求についてですが、まだ言えません。ユイさんをサルベージした後にお伝えします。あなたとユイさんを引き裂くような要求はしないことを約束しますから、心配する必要はありませんよ。」

男の答えは予想外のものだった。ユイを連れ戻すことで、彼に何かメリットがあるのだろうか？彼の目的は何なのか？気になることはいくつか有ったが、何故か“彼が約束を破るのではないか”という懸念を抱くことはなく、ゲンドウ自信もそれを不思議に思った。理由はわからないが、彼は信じる事ができた。

ユイが帰ってくる、突然訪れた幸福にゲンドウの表情も緩む。ふと、そんな彼の脳裏に、一人の少年が浮かび上がった。彼は男に言った。

「シンジが…私の息子が不幸になるような要求も出さないと約束してくれ」

「もちろんです」

男は微笑みながら答えた。そして、今度は男が口を開いた。

「そういえば、あなたの問いに答えていませんでしたね。僕は狩^か威^りシンゴと申します。歳は18です」

「狩威くん、か…君は何を知っている？」

ゲンドウは、狩威に対して聞きたいことは沢山あったが、とりあえず一つ質問してみた。

「そうですね…あなた方の計画や、ゼーレの人類補完計画、死海文書と裏死海文書、綾波レイの正体、あなたと赤木親子との関係は知っています。あなたが知りたかったのは僕がこれらについて知っているか、ということでしょうか？」

「そうか…」

やはり、彼は全て知っていた。

「…？…あなたにとつては拙いことでは無いんですか？」

「ユイは君がサルベージしてくれるのだろうか？もはや私の計画は必要なくなった」

「こんな事を言うのは悪いですが、まさかあなたがこんなに人を信用するとは思っていませんでしたよ。ユイさんをサルベージして信用してもらってから要求をお伝えしようと思っていました。その必要は無さそうですね」

彼の要求は次のようなものだった。

- ・自分を司令部所属の職員としてネルフに置くこと
- ・綾波レイの素体の処理を自分に任せること
- ・ダミープラグの開発中止

そして…

「最後に、ユイさんと共に碇シンジと綾波レイに“親”として接し、彼らを育てる事です」

「分かった。要求を呑もう。しかし…」

「なんです？」

「君の目的は何だ？」

「ゼーレの討伐、ゼーレやネルフによって残酷な運命を辿るよう仕組まれた人達を救うこと、そして使徒を本能から解放することです。」

「！？…使徒の本能からの解放だと？どうするっていうのだ？」

「使徒はアダムを求める本能に縛られています。彼らをその呪縛から解き放ち、人間社会で暮らせるようにしてあげたいと思っています。ゼーレの討伐も彼らに手伝ってもらえますしね」

我々とは考えることの大きさが違う、ゲンドウはそう思った。

「サルベージについてですが、明日の23時から行おうと思います。立会人はあなたと冬月コウゾウ副指令、赤木リツコ博士、葛城ミサト三佐の4名のみでお願いします。それ以上でもそれ以下冬月副指令は今はいらっしゃらないようですが、彼には僕の事を話しておいてください。赤木博士にサルベージを行うことを事前に伝えるかどうかはお任せします。」

「しかし…赤木博士は…僕にも考えがあるので、なんとかお願いできないでしょうか？万が一、赤木博士がユイさんを排除しようとしてもユイさんに危害が加わらないようにしますから」

「…分かった。そのように手配する」

「ありがとうございます。では僕はこれで失礼します」

「ああ」

シンゴは別の空間に繋がるような黒い穴を展開した。もはや驚く事もあるまい、とゲンドウは椅子に座りなおし、机に肘をつけて顔の前で手を組んだが、重要なことを聞くのを忘れていたので、慌てて立ち上がって帰ろうとしているシンゴに叫んだ。

「ま、まっしてくれ！ユイをサルベージしたら、初号機の運用はどうするのだ？」

「あ…そういえばそのことを説明するのを忘れてました」

彼は苦笑いしながら言った。

「初号機はサルベージと同時にシンジくんが乗れる状態にしておきます。彼を戦いに巻き込むのは心苦しいですが、ゼーレのことを考えると僕が代わるわけにもいきませんので…」

「そうか、分かった」

「では、今度こそ失礼します」

- - -
- - -
- - -

第三新東京市 郊外

黒い穴が現れ、中からシンゴが現れる。

「ふう、とりあえず最初の布石は済んだ。絶対にあの紅い世界にはさせない！そのために還ってきたんだ」

彼はそうつぶやいた。

狩威シンゴ、彼の正体は、サードインパクト後から未来を変えるために還ってきた“元”碇シンジである。“助っ人”として影で動

く彼に未来を変えることはできるのだろうか。

第一の布石（後書き）

初めて投稿させていただきませす。物語と設定が混ざったような文章になつてしまい、読みにくくなつてしまいました。また、表現が適切でない部分があるかもしれません。駄文ですが、読んでいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2327y/>

助っ人

2011年11月5日02時03分発行